北海道帝国大学の営繕組織の沿革と建築技術者について

THE HISTORY AND THE STAFFS OF THE ARCHITECTURAL SECTION OF HOKKAIDO IMPERIAL UNIVERSITY

池上 重康*, 越野 武**, 角 幸博***

Shigeyasu IKEGAMI, Takeshi KOSHINO and Yukihiro KADO

We ascertain the history and the staffs of the architectural section of Hokkaido Imperial University between 1918 and 1940, and tried defining it as a part of the official architectural organizations. There was an aspect of the control by the Education Ministry, that only the men who had had some experience in the architectural section of the Education Ministry were appointed to the engineers or the assistant engineers in the period from 1918 to 1921. With the enactment of 'Law of University' and 'Law of Higher School' in 1918, however, we can say that, the improvements of the facilities and the cultivation of the architects along with the progress of higher education enabled the architectural section of the University to employ its staffs and design its facilities independently.

Keywords : Hokkaido Imperial University, architects' and engineerings' organization, architectural section of Education Ministry, engineer, part-time engineer, assistant engineer

北海道帝国大学、営繕組織、文部大臣官房建築課、技師、嘱託、技手

1. はじめに

日本における帝国大学(以下、帝大と略)の営繕組織とその技術者および建築活動については、先に宮本雅明による『日本の大学キャンパス成立史』¹⁾があり、明治期の文部省営繕組織の建築技術者とその活動をまとめている。ここで宮本は、大正後半以降は帝大において学部が多数新設され、一方で各帝大の営繕組織²⁾は文部省中央からの独立化が進行したと指摘している。しかし、その独立化の具体的な内容は示されていない。

大正7年12月には「大学令」および「高等学校令」が公布され、全国高等教育機関の創設および拡張政策が打ち出された。これに先んじて同年4月に独立帝大(従前は東北帝大農科大学)へと昇格した北海道帝大では、新設となった医学部と工学部の校舎建設に向けて、独自の営繕組織が設置され、キャンパス施設の建築と営繕スタッフの充実が並行して行なわれた。こうした背景もあって北海道帝大は、大正後半以降の文部省中央からの独立を具体的に一帝大の営繕組織の構成と職務内容についてうかがうことができる格好の事例といえる。

他の帝大においては、京都帝大に関する研究³⁾のほかに、東北帝大と九州帝大についての報告⁴⁾があるが、いずれも技師や技手など中心的なスタッフの来歴を明らかにするか、建築活動に重点をお

き、設計者や建築的特徴を考察するに留まっている。特に大正後半以降の文部省中央からの独立化を、具体的に一帝大を対象に営繕組織の沿革および建築活動について考察した詳細な報告はまだない。

ところで宮本は前掲書において、北海道帝国大学に関して、その前身である札幌農学校(以下、農学校と略)および東北帝国大学農科大学(以下、農科大学と略)時代を対象に、文部技師として大臣官房建築課札幌出張所に赴いた中條精一郎(1868~1936)と新山平四郎(1869~?)の2名を中心に考察しているが、北海道帝大として独立以降は断片的な扱いに留まっている⁵⁾。また、菅野誠は『日本の学校建築』⁶⁾の中で、北海道帝大時代の建築のうち工学部本館を取り上げ、その設計者について考察しているが、これ以外の建築およびその設計者については言及していない。

北海道内の官庁営繕組織に関するこれまでの研究においても、開拓使や北海道庁、道内各自治体を中心に、職員の移動といった形で北海道帝大(およびその前身)の営繕組織との関連が指摘されるのみである⁷⁾。拙稿『北海道帝国大学および小樽高等商業学校備外外国人教師官舎(大正14年~昭和2年)について』⁸⁾で、北海道帝大の官舎設計にたずさわった営繕課職員数名を概略紹介したが、組織の変遷および構成員についての総合的な考察は別途報告することにした。また、北海道帝大の建築活動についても報告してきた⁹⁾が、

* 北海道大学大学院工学研究科都市環境工学専攻 助手・工修

** 北海道大学大学院工学研究科都市環境工学専攻 教授・工博

*** 北海道大学大学院工学研究科都市環境工学専攻 助教授・博士(工学)

Research Assoc., Div. of Urban and Environmental Eng., Graduate School of Eng., Hokkaido Univ., M. Eng.

Prof., Div. of Urban and Environmental Eng., Graduate School of Eng., Hokkaido Univ., Dr. Eng.

Assoc. Prof., Div. of Urban and Environmental Eng., Graduate School of Eng., Hokkaido Univ., Dr. Eng.

いずれも断片的、あるいは通史的なものであり、建築技術者については、主に営繕課長を中心にふれたにすぎない。

そこで本稿では、主に北海道大学所蔵の史料—総務部人事課所蔵『履歴簿』および、施設部企画課所蔵の1,500葉をこえる設計図面、経理部管財課所蔵『北海道大学所属国有財産沿革』（全12冊と所管不明の図面および簿書を含んだ付録2冊の計14冊、以下『国有財産沿革』と略）—をもとに、北海道帝大の営繕組織の沿革および建築技術者の全貌を明らかにするとともに、官庁建築設計組織の一つとしての北海道帝大営繕課の位置付けを試みるものである¹⁰⁾。

『履歴簿』からは、技師、技手にとどまらず、これまでの帝大営繕組織の研究ではほとんど顧みられることのなかった嘱託や雇などの建築設計への関与も読み取ることができる。さらに、北海道帝大は学内に建築学科を持っていなかったため、建築設計顧問という建築設計に対するイニシアチブを握るプロフェッサー—アーキテクトが存在していないという点で、他の帝大営繕組織とは様相を異にする。設計体制を含めた営繕組織の全貌を明らかにするには、特に北海道帝大においては嘱託や雇も含めた建築技術者全体を対象に考察を加える必要があろう。組織の沿革や技術員の特性を把握せずに、具体的な建築事例を挙げ、設計者や建築的特徴を論じることは、かえって営繕組織の全貌を見えづらくする危惧があると考え、本稿では営繕組織と建築技術者の全容を明らかにすることに努め、個々の建築物の建築的特徴と、その設計者および設計体制の考察については稿をあらためて報告することにしたい。

2. 営繕組織の変遷と職員構成

北海道帝大は、札幌農学校(明治9年創立)、東北帝大農科大学(明治40年改組)の時代を経て、大正7年4月に創立した。

大正6年度以前は、後述のように文部大臣官房建築課と別組織の大学独自の営繕機構はなく、また同建築課札幌出張所の職員についても不明な点が多いため、職員構成を把握することは現時点では困難である。そこで本稿では、北海道帝大創立および営繕組織の設置とも重なることから、大正7年度以降をとりあげた。また、昭和16年度以降は職員の出入りが激しく、かつ建築工事件数も激減する¹¹⁾ため、第二次大戦勃発以前の昭和15年度までを対象とした。

大正7年度以降の営繕職員数の推移を示したものが図-1である。『北海道帝国大学職員録』から、昭和2年度以降の技師、技手、嘱託および雇の氏名を確認できる。それ以前については、『北海道帝国大学一覧』から、技師、技手および嘱託の氏名を知ることができるのみで、雇については各々の『履歴簿』に記述してある在

任期間から人数を算定した。なお、営繕職員数に書記は含まないが、技術者については建築以外が専門の者も算入している。

図-2は大正7年度以降昭和15年度まで在職した営繕職員のうちで、『履歴簿』より経歴が判明する主な建築技術者について、最終学歴、在任期間、北海道帝大着任前の略歴について一覧にまとめたものである。

ここでは大正6年以前をあわせて、昭和15年までの文部大臣官房建築課と、北海道帝大(前身含む)営繕組織との関連および沿革、技師および嘱託に着目して簡単にまとめておきたい。

2-1 北海道帝国大学設立以前

農学校時代は、北一条キャンパスの前期(明治9年～32年)と、北八条キャンパスの後期(明治32年～40年)に二分される。農学校の管轄は、創立から明治15年2月までが開拓使、同年3月から19年1月までが農商務省(北海道事業管理局扱)、同年2月から28年3月までが北海道庁、同年4月以降が文部省と変遷している。

校舎等の設計業務はその時々管轄主体によって行なわれていた。創立期の前期農学校の諸建築は開拓使工務局が担い、後期農学校キャンパスは文部大臣官房建築掛札幌出張所(以下札幌出張所)が設計している。その主任技術者として安達喜幸(1827～1884)および中條精一郎が知られている。

札幌農学校の組織内に営繕事務機構は存在するものの、その中に設計組織は置かれていなかった。明治9年の『職制』¹²⁾に見る「理事」、同28年『校務規程』¹²⁾の「会計部営繕掛」、同32年『処務規程』¹²⁾の「会計課」がそれに相当するが、その内容からは設計業務の存在をうかがうことはできない。

明治40年、農科大学への改組、改称に伴い、明治44年4月1日に「会計課」の中に「臨時建築係」が発足した。この時、文部大臣官房建築課雇として札幌出張所に勤務していた安積久助(1881～1923)が農科大学より「会計課臨時建築係」雇を命ぜられた。『履歴簿』によると、その職務は「工事検査官吏」である。『国有財産沿革 付録』収録の簿書中に、建物台帳の作成に関する面積や価格の算定、平面図の記録などに安積の署名および捺印が確認でき、主な職務にはこれらが相当すると推察される。

明治40年6月から大正元年12月まで札幌出張所長であった新山平四郎¹³⁾は、明治44年4月に農科大学より「臨時建築工事設計監督」を嘱託されているが、『履歴簿』の記載を見るかぎり、前述の「会計課臨時建築係」への勤務は命ぜられていない。したがって、この時期の「会計課臨時建築係」もまた農学校時代と同様、設計業務を扱わない機構であったと推察される。もちろん「会計課臨時建築係」勤務で設計業務を委嘱された建築技師の存在は確認できない。

新山の退職後、大正6年までの札幌出張所長不在期間¹⁴⁾を経て、大正6年9月に浦五十吉(1889～?)が、翌年の北海道帝大設立に向けて、文部省より「札幌医科大学新設工事の設計」の嘱託を受け、文部大臣官房建築課において執務する¹⁵⁾。大正6年10月には栗山俊一(1882～?)が東北帝大技師に任官され農科大学勤務となる。制度上は東北帝大所管だが、実際には農科大学専属の営繕技師として勤務していた。浦の嘱託、そして栗山の農科大学への着任は、北海道帝大営繕組織設立への準備段階ととらえることができるであろう。

図-1 北海道帝国大学営繕職員数の推移(書記を除く)

2-2 北海道帝国大学設立および営繕課設置以後

大正7年4月1日、東北帝大から分離独立し、北海道帝国大学が設立された。同時に、後の「営繕課」の母体でもあり、かつ初めての設計業務を担う組織である「建築事務所」（一般の建築事務所との混同を避けるため、以下カギ括弧付きの「建築事務所」とした場合、北海道帝大会計課建築事務所を指すことにする）が「会計課」内に設置され、栗山がそのまま技師兼所長となった。栗山は翌8年2月に台湾総督府へ転出したため、同年7月に田中豊太郎（1870～？）が赴任するまでの4ヵ月間は所長不在であった。栗山と田中が所長を務めた「建築事務所」時代は、わずか4年の間に医学部（もしくは医科大学）新設工事設計の名目で、浦、田中興作（1865～？）、松田熊吉（1877～？）、佐立忠雄（1886～1957）の4名の嘱託が、任期を重複することなく代る代る委嘱されている。

大正11年1月『北海道帝国大学処務規程』改正により「建築事務所」は「会計課」から独立し「営繕課」へと組織変更された¹⁶⁾。ところが時を同じく、当時日本赤十字社北海道支部建設顧問を嘱託されていた田中は旭川での同病院設計のため退職¹⁷⁾し、「営繕課」の設置当初は課長が不在となっていた。そのため安積が課長心得を務めていたが、その安積も急病により大正12年4月27日に逝去する。同年5月に文部技師岡林音松（1885～？）が、ようやく初代課長として就任した。岡林は北海道帝大設立のための当初新設予定であった工学部、医学部および附属病院の工事がほぼ完了した昭和2年9月をもって退任し、続いて理学部の開学に向け昭和2年6月より嘱託を受けていた北海道庁技師萩原惇正（1892～？）が営繕課長に着任することになる。

営繕職員数も大正11年度より徐々に増加し、昭和3年度には設立当初から倍増の25名を数える（但し事務員は含まない）。昭和3年12月には「営繕課」が「事務係」と「工務係」に分割された¹⁸⁾。萩原の在任中には、瀧野頼太郎（1902～？）が理学部新営工事設計のため技師兼嘱託として委嘱された。北海道帝大営繕課で唯一技師が複数名在籍した期間である。昭和9年5月には病氣退職した萩原の後を受け、落藤藤吉（1901～1959）が着任する。戦時体制への突入とともに、建築工事件数が減少し、それに伴い営繕課人員も主に雇が削減されていった。

3. 主な営繕技術者

ここでは、北海道大学人事課所蔵『履歴簿』を基礎史料に、技師をはじめとして、北海道帝大キャンパス施設の設計および計画に関与したと考えられる主要な営繕技術者の履歴を紹介し、北海道帝大営繕組織内での役割について考察する。

3-1 技師

栗山俊二 — 明治42年7月東京帝大工科大学卒業。明治43年1月から名古屋高等工業学校建築科講師を勤め、同44年1月に教授となった。担当科目は「一般構造」¹⁹⁾。名古屋高等工業学校在任中、朝鮮総督府の嘱託を受け、朝鮮において古蹟調査を数度行なう。

大正6年10月東北帝大農科大学に勤務、「医科大学新営費所属物品会計官吏」および「医科大学新営工事検査官吏」を任命され、同7年4月の北海道帝大への昇格にともない同建築事務所所長を命ぜら

れた。大正8年2月、台湾総督府技師に転任している。

田中豊太郎 — 明治23年2月工手学校造家学科卒業。卒業後直ちに陸軍省図工となり、28年9月に陸軍技手、29年4月に臨時陸軍建築部技手となる。37年8月には大蔵省臨時煙草製造準備局に転じ、三橋四郎のもとで技手として働く。38年10月に大蔵省臨時建築部技手となり、その間に『和洋建築工事仕様設計実例』²⁰⁾を著わしている。明治41年から大正2年までの間、公務の余暇に神田の私立東京工科学校建築科で講師を勤めた。大正3年5月から一時期、倉敷紡績に勤務。大正6年9月には文部省建築課に移り、大阪高等工業学校校舎新築設計にたずさわリ、翌7年4月には同省建築課大阪出張所長心得となる。

大正8年6月、北海道帝大より「工学部創設工事ノ設計及監督」を受け同建築事務所所長となる。同8年10月には大臣官房建築課札幌出張所長心得を併任する²¹⁾。前述のように、大正11年1月に日本赤十字社旭川病院建設のため退職し、その後は札幌で建築事務所を自営した。大正14年に『建築仕様全集』²²⁾を出版。昭和4年より、長野野平治に請われ、日本銀行第一期増築工事の現場監督を勤めたが、その後体調を崩し、第二期工事の半端で辞職した²³⁾。

岡林音松 — 明治41年7月名古屋高等工業学校建築科卒業後、ただちに帝国鉄道庁（後の鉄道院）雇となり、43年7月技手となった。大正4年3月には島根県技手、同8年12月には同技師を勤め、その間大正6年から松江市母衣商工業補習学校および白濁商工業補習学校の訓導を兼任している。大正9年8月から文部技師となり大臣官房建築課松江出張所長兼鳥取出張所長を勤めた。

大正12年5月、北海道帝大に営繕課長兼技師として就任。同13年4月から土木専門部講師を嘱託、同年12月から文部大臣官房建築課札幌出張所長を兼任した。医学部附属病院（主要棟は大正12年～昭和2年に竣工）と工学部本館（大正12年12月6日）の建設工事中に在任しているが、『履歴簿』には「会計官吏」や「検査官吏」などの拝命があるのみで、設計業務に関与した記述は見られない。

萩原惇正 — 明治44年7月関西商工学校建築学科卒業後、河合建築事務所²⁴⁾を経て、大正6年11月より大蔵省臨時建築課に勤務、大阪税関庁舎新築工事設計を行なう²⁵⁾。大正9年9月文部大臣官房建築課神戸出張所長心得となり、神戸高等商船学校創立工事設計および監督を、同12年4月からは姫路出張所長心得となり、第二四高等学校創立工事設計および現場監督を担当した。

大正12年8月北海道庁土木部建築課に建築技師として着任、昭和2年6月には北海道帝大より「新営工事二関スル設計及監督」の嘱託を受けた。同年8月に北海道帝大技師、9月に同営繕課長となっている。昭和3年4月に「理学部創設二関スル工事設計及監督」を拝命、学内初の本格的RC造である理学部本館の設計を手掛けた。

落藤藤吉 — 大正14年3月東京帝大工学部建築学科卒業。同年4月大阪府警察技師、昭和3年11月に大阪府建築技師となる。昭和9年5月より北海道帝大営繕課長を勤めた。戦後、改組により文部大臣官房教育施設部札幌工事事務所所長兼北海道大学事務局施設課長に就任、昭和25年からは2年前に新設された北海道大学工学部建築工学科建築計画学第一講座教授も併任した。

3-2 嘱託

栗山と田中が所長を勤めた「建築事務所」時代に在籍した4名の

表-1 佐立忠雄の大倉土木勤務時代の関与作品

大倉喜八郎英町本邸模様替工事製図(助手)
 東京製綱会社大島町製綱所全部新築工事設計並製図
 日本化学工業会社津電解工場新築工事設計並製図
 同会社取締役加瀬忠次郎鎌倉別邸新築工事設計(主任)並現場監督
 東京製綱会社月島工場災害復旧工事設計並製図(工学士板部保治*と共同)
 日本化学工業会社亀戸工場塗料部新築工事設計並製図(〃)
 同郡山工場全部新築工事設計並製図(〃)
 東京製綱会社社長山田昌邦邸洋館新築工事設計主任及製図
 医学博士吉井直三郎邸模様替工事設計主任並現場監督
 相模紡績会社取締役牧山熊二郎平塚別邸設計主任
 大倉喜八郎小田原別邸新築工事設計(伊東忠太監督)
 牧山熊二郎高田馬場本邸新築工事設計主任
 郡山大日本紡績会社工場設計主任
 喜谷市郎右衛門**渋谷本邸設計主任
 加瀬忠次郎目黒別邸新築工事設計主任

山本悌二郎***洋館設計(独逸人建築家ワセランの原作に基づく)

* 坂部は大正10年に九州帝国大学営繕課に転出

** この当時は帝国ホテル取締役

*** 台湾製糖社長、後に衆議院議員。田中義一内閣時代には農林大臣を務めた。
 自邸は上目黒(現在の目黒区役所の一角)にあった。(孫の山本加寿子氏による)
 ワセランという名前のドイツ人建築家については不明。

嘱託は、先にも述べたように、いずれも医学部新築工事の設計を委嘱されている。

浦五十吉は大正4年東京帝大建築学科を卒業し、大正6年9月に北海道帝大より「札幌医科大学新築工事設計」の嘱託を受けている。次に入れ替わるように着任した田中興作と松田熊吉は、ともに『履歴簿』には学歴の記載がないため、正規の建築教育を修学していないことが想像できる。田中興作は明治28年から同36年まで陸軍検疫所および埼玉県技手、大正初年には台湾総督府民生部土木局に勤め²⁶⁾、大正7年10月に北海道帝大建築事務所勤務となった。栗山の退職後、田中豊太郎が着任するまでの4ヵ月間、建築事務所長代理を勤めている。松田は新家孝正²⁷⁾の元で東京勧業博覧会の建築助手を勤めた後、東京府工手、朝鮮総督府鉄道管理局雇、技手を歴任した。その後、長野県郷田建築事務所、長野市松田工務店に勤務し、建築を現場において学んでいる。北海道大学着任直前にも再び新家に就いて建築を学んでいた。佐立忠雄は佐立七次郎の長男で、大正3年に早稲田大学を卒業(2期生)している。卒業間もない大正4年3月から曾禰中條建築事務所に客員として入所し、曾禰達蔵に就き建築設計に関する実地指導を受けた。同年8月には片山東熊の紹介により大倉土木組に入社している。大倉土木在職中に関与した建築設計業務は多数あり、『履歴簿』の記載内容を表-1に示した。大正10年6月北海道帝大より「医学部新築工事ノ設計並督工」の嘱託を受け、同11年11月30日まで在職した²⁸⁾。在職中には小樽市に現存する「和光荘」(大正11年竣工)の設計を行なっている。

瀧野剛太郎は大正14年東京帝大建築学科の卒業で、同年から神奈川県技手および技師を勤めた後、昭和2年11月北海道帝大より「理学部新営工事二関スル設計及監督」を嘱託された。同年12月には北海道帝大技師、同3年12月には文部技師となっている。

酒井菊次郎²⁹⁾(1873~?)と玉木金治(1870~?)の2名は、北海道帝大着任前は北海道庁の技師および技手であった。酒井は特に学部の指定はなく「新営工事二関スル設計及監督」を、玉木は「理学部新営工事二関スル臨時設計及監督」を嘱託されている。両者とも設計の名目で委嘱されているが、酒井はその後「営繕課長出張不在中事務代理」、「医学部建築事務」、「営繕課長事務」の命を受けてお

り、もっぱら事務取扱を担当していたと考えられる。一方の玉木は道庁時代には治水事務所に勤務しており、土木系の技術職であったことがうかがわれる。

3-3 その他おもな営繕技術者

ここでは技手および雇のうち、特に重要と思われる技術者の略歴についてふれておきたい。

安積久助 - 明治32年工手学校造家学科卒業。卒業後3年間は文部省総務局建築課雇として東京工業学校改築工事にたずさわり、その後仙台に移り土木請負業に従事、明治39年3月から翌年1月まで私立東北中学校の臨時建築技手を勤めた。明治40年3月に文部大臣官房建築課雇となり、同年7月に東北帝大創立事務取扱として札幌出張所勤務となった。以後の履歴は前述の通りである。

指田竹次郎(1891~?) - 明治42年東京高等工業学校附属工業補習学校建築科を卒業後、2年間東京の工務店に勤務。明治45年3月に東京工科大学建築科へ入学し、大正2年3月に卒業した。卒業後直ちにゲー・デ・ランデ建築事務所に入所、建築設計部勤務となる。しかし、入所わずか1年余後の大正3年8月、デ・ランデの死去にともない同事務所を辞職、同年9月より倉敷紡績建築科へ転じる。大正5年3月に同社を退職し、同年4月から東京神田の木田建築事務所へ就職した。大正9年6月北海道帝大雇となり「医学部新設工事係」を命ぜられる。この時点での月俸が65円。同年8月には108円、12月には120円となっている。ちなみに、指田と同様、東京の私立工業学校卒で雇の阿部千代吉は55円(大正9年8月)、県立工業学校卒の雇舩谷乙治が78円(同)、文部大臣官房建築課から技手として着任した三宅保太郎が108円(同)、同じく技手の安積久助が123円(同)であったことを考えると、雇とはいえ、給与面では技手レベルの待遇を受けていたことがわかる。大正10年2月末に依願解雇となっている。

舩谷乙治(1893~?) - 明治45年秋田県立秋田工業学校建築科を卒業。第八師団経理部秋田派出所雇、秋田県庁内務部土木課建築助手を経て、大正7年11月北海道帝大雇、同12年に技手となる。

太田延雄(1896~?) - 大正2年島根県立工業学校建築科を卒業。兵庫県尼崎市東亜セメント、大阪窯業建築部技手、京都市技手などを経て、大正9年9月より文部大臣官房建築課雇となる。鳥取出張所へ赴き、大正11年からは鳥取商工専修学校講師を委嘱、同12年3月末日をもって御用済みにより解雇。その後、東京市で民間建築工事にたずさわり、大正13年3月北海道帝大技手、営繕課勤務となる。在職中、公務の傍ら医学部教授有馬英二郎(昭和3年竣工)と同内村祐之郎(昭和5年竣工)を設計している。

岡田鴻記(1907~1981) - 昭和3年神戸高等工業学校建築科卒業後ただちに北海道帝大技手となる。公務の余暇に萩原惇正とともに理学部助教授(当時、後に北海道大学学長)杉野目晴貞郎(昭和8年竣工、登録有形文化財)を設計している。戦時中満州(現中国東北方)に赴き、終戦後1950年から札幌で設計事務所を自営した。

4. むすび - 北海道帝大営繕課の設計体制 -

文部省営繕から独立以降の帝国大学営繕組織の活動の一事例として、北海道帝大営繕課の沿革および主な職員の履歴について述べて

きた。ここでは、各人の履歴を検討、整理することにより、北海道帝大営繕課の組織体制に考察を加え、むすびとしたい。

北海道帝大営繕課は、営繕課長と文部大臣官房建築課札幌出張所長兼任の技師が1名（瀧野の在任期間のみ2名）、設計および督工の嘱託が1名、技手が2～4名という体制が常時ほぼ変わることなく、必要に応じて雇を加え、設計活動を行っていた。北海道帝国大学官制第5条ノ4に「技手ハ専任五人判任トス、上官ノ命ヲ承ケ技術ニ従事ス」³⁰⁾とあるが、実際に専任の技手が5人を数えたのは昭和14年度のみである。不足している技手を補ったのは、新設工事設計を機にその時々と呼ばれた嘱託で、彼らがある種、専任技手のかわりとして、あるいは、それ以上の働きをしたと考えてよいであろう。

技師に限ってみるならば、栗山に始まり萩原にいたるまで全員が文部省札幌出張所長との兼任であり、形式的には落藤の時代になって初めて文部省中央からの独立が計られたように映る。しかし、現実には中條や新山が文部省本省からの出向であった³¹⁾のに対し、栗山以降の技師はすべて地方の出張所からの転任であった。このことは、文部大臣官房建築課の組織自体が「大学令」および「高等学校令」にともなって巨大化したことの頭われでもあるが、翻せば各地方の出張所機能が充実し、本省からの独立が図られたことの裏づけにもなる。さらに北海道帝大では独自の営繕組織を持ち、その所員を充実することにより、キャンパス内の諸施設の建設を行ってきた。建築一件書類中³²⁾に文部省との往復文書を確認することができるが、その文面はあくまで文部省への報告であり、実質的な決定権は北海道帝大営繕にあったことがうかがわれる。

設計業務だけでなく人員の募集も北海道帝大自体で、更にいうなら課長（もしくは所長）の自由裁量が認められていた。田中豊太郎が建築事務所長を勤めていた時代に、その傾向を顕著に見ることができる。大正9年6月に雇として勤務した指田竹次郎は、田中が教鞭をとっていた時代の東京工科大学の卒業生であり、さらに北海道帝大勤務前には田中と同じ倉敷紡績に勤務している。田中の伝で北海道帝大へ着任したことが容易に想像できよう。また田中は、松田の退職から佐立の着任までの嘱託の不在期間に、地元札幌の技術者を集中的に採用している。指田が呼び寄せられたのも、まさにこの時期にあたる。その後の採用人員も、過半は地元札幌で官庁営繕もしくは建設業についていた者である。営繕課への改組以後、岡林の時代になると、地元技術者の採用傾向はより一層顕著になる。このように営繕スタッフ採用の自由度といった点からも文部省中央からの独立傾向を裏付けることができる。

最後に営繕職員の経歴についてまとめておきたい。宮本は前掲論文で、大正期以降の「帝国大学の技師はいずれも東京帝国大学建築学科の卒業生にて占められ」と考察しているが、本稿で述べてきたように東京帝大卒の建築技術者は技師4名、嘱託2名（うち1名はまもなく技手）を数えるのみである。中央との関連を東京帝大卒という学歴で表わそうとしたと考えられるが、筆者らは、その傾向を文部省勤務との関連から考察したい。「建築事務所」時代の技師および技手はすべて文部省勤務の経歴を持つ。その反面、嘱託の4名および給与では技手レベルの待遇を受けていた指田には文部省勤務の経歴がない。つまり「建築事務所」時代には人員の採用に関しては自由度が与えられていても、現実的な任官になると文部省勤務

の経歴があるものは技師および技手にはなりえるが、ないものはあくまで嘱託か雇としてしか勤務できなかったといえ、制度上の待遇の違いを月俸の額で埋め合わせていたことが推察できる。大正11年の営繕課設立以後は、文部省勤務経験のない舩谷がまず技手に登用されることに始まり、さらに落藤の時代には地元札幌出身の大木、楨、宮野、那須などの雇が技手に昇格し、文部省中央指導型の任官は完全に払拭される。

また、『履歴簿』に学歴の記載のないものが若干名いるため確定的なことはいえないが、高等工業学校（もしくは工手学校）以上の高等教育を受けた者が、技師を含め技手および嘱託として業務をこなし、雇は大半が工業学校卒で占められている傾向がみられる。雇員のうち地元札幌の出身者は半数を数える。札幌における建築教育は大正6～8年の札幌区立商工補習学校に始まっており、北海道帝大の営繕組織の設立と合致していることがわかる。

以上、本稿では北海道帝大の営繕組織を対象に、一帝大営繕組織の文部省中央からの独立化の進行の具体的内容を考察してきた。「建築事務所」時代には任官の面において文部省中央指導型の一面があったことは否定できないが、「大学令」および「高等学校令」が契機となって、キャンパス施設というハード面の整備がなされ、さらに高等教育機関の充実にもともなう建築技術者の養成が相まって、北海道帝大の営繕組織が独自の活動を行なうようになったといえることができるであろう。

[註記]

- 1) 九州大学出版会、1989年。
- 2) まず、明治40年6月21日に東京帝大と京都帝大に営繕課ならびに建築部がおかれ、同45年3月31日に東北・九州の両帝大に建築掛と営繕課が設けられた。
- 3) 京都大学工学部建築史研究室編『京都大学建築八十年のあゆみ—京都大学構内歴史的建造物調査報告』（京都大学庶務部広報調査課刊、1977年）
- 4) 西村公宏『東北帝国大学医学部の外構について』（日本建築学会東北支部研究報告集第59号、1996年6月）および、片野博『福岡県における国の地方機関活動実態とその問題点、明治・大正・昭和 建築活動の地方性に関する研究』（日本建築学会計画系論文集 第464号、1994年10月）などがある。
- 5) 技師として栗山俊一、萩原惇正、落藤藤吉の3名の名前を紹介しているのみである。
- 6) 文教ニュース社、1983年。
- 7) 例えば、廣田基彦『開拓使・道庁営繕80年の覚書き』（私家版、1997年10月）、小坂映王ほか『昭和初期における小樽市の営繕事業について』（日本建築学会北海道支部研究報告集No.63、1990年3月）、安藤理美ほか『札幌市の大正・昭和初期営繕組織について』（日本建築学会北海道支部研究報告集No.69、1996年3月）がある。
- 8) 日本建築学会計画系論文集 第484号、1996年6月。
- 9) 例えば、越野『札幌農学校、北大の建築』（『北海道の開拓と建築 上巻—解説・写真』、1987年）、江下友三枝ほか『北海道帝大創立期の医学部および同附属医院の建築について』（日本建築学会北海道支部研究報告集No.69、1996年3月）、山後正憲ほか『後期札幌農学校のキャンパスの建築に関する史的研究』（日本建築学会北海道支部研究報告集No.71、1998年3月）、渋谷善人ほか『後期札幌農学校・東北帝国大学農科大学における建築活動』（日本建築学会北海道支部研究報告集No.72、1999年3月）がある。
- 10) 本稿は、江下、越野、角、池上『大正・昭和初期における北海道帝国大学の営繕組織について』（日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿)、1996年9月）で発表したものに大幅に加筆・修正を加え、再構成したものである。
- 11) 昭和16年12月に低温科学研究所が竣工しているが、これは海軍省の委託による。
- 12) これら簿書は、すべて北海道大学附属図書館北方資料室所蔵。
- 13) 明治35年6月から札幌出張所長心得を任官されている。また、宮本は前

掲書で、新山が明治42年12月ごろに札幌出張所長から秋田出張所長に転じたと指摘しているが、『履歴簿』の記述によると、あくまで札幌出張所長のまま、明治42年12月から秋田出張所長、明治43年4月から小樽出張所長を兼任したことが読み取れる。

- 14) 北大施設部企画課所蔵の農科大学時代の建築一件書類によると、新山退職の翌大正2年の工事仕様書には安積の捺印および訂正印が見られるが、大正3年以降の仕様書には工事請負人大星三松および大星鶴松の捺印・訂正印がある。この期間は、建築工事だけでなく、設計も外部発注であったことが想像される。
- 15) 『履歴簿』には具体的な勤務地の記載がないため、東京の文部省本省勤務か、札幌の建築出張所勤務かの判断はつかない。文部省のみに勤務の場合は、例えば中條精一郎がそうであるように、北海道大学には『履歴簿』が保管されない。浦は『履歴簿』の記述だけから判断すると、文部省勤務のように受け取れるが、北海道大学に『履歴簿』が保管されていること、大正7年度の建築関連簿書（北海道大学施設部企画課所蔵）に建築事務所勤務として名前が確認できることから、なんらかの形で北海道帝大より建築事務所勤務を囑託されていたと推察できる。
- 16) 大正11年1月1日付制定「北海道帝国大学処務規定」の条文には営繕課の庶務内容が以下のように記されている。
「第九条 営繕課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル。
一 建築物ノ設計及工事ニ関スル事項
二 建築物ノ修繕ニ関スル事項
三 暖房給水瓦斯電気及冷蔵装置ノ新設又ハ修繕ニ関スル事項
四 器具機械類ノ設計並製図ニ関スル事項
五 工事請負及物件供給ニ関スル事項
六 物品会計ニ関スル事項」
大正11年には「土木工事ノ設計並ニ施工ニ関スル事項」が追加された。
- 17) 大正11年5月11日に日本赤十字社北海道支部より囑託を受けている。旭川病院は大正12年12月に竣工した。RC造2階建て。
- 18) 工務係の業務は、註15) 記載の項目のうち一、三、五、六および大正13

年の追加事項が該当し、さらに「建築材料其他諸般ノ調査ニ関スル事項」が追加された。また昭和5年に庶務規定が改正になり、「土木、建築、同附属工作物、同付帯設備並ニ仮設物ニ対スル新設、増、改、移築修繕等ノ場合審査ニ関スル事項」が追加された。

- 19) 日本建築学会編『近代日本建築学発達史』（丸善、1972年）による。
- 20) 建築書院発行、1905年。上下巻。辰野金吾および妻木頼黄による序文があり、三橋四郎が校閲。
- 21) 後述するように、田中は文部大臣官房建築課札幌出張所長心得を併任する。『建築雑誌』大正9年7月号に、田中の紹介による、札幌在住で「文部省建築課出張所」勤務の准員福山繁記という人物が記載されている。福山の『履歴簿』は北海道大学には保管されていないので、北海道帝大建築事務所には関係のない、文部省管轄の技術員であると想像できる。
- 22) 建築書院発行、1925年。矢橋賢吉の校閲。また1929年には工業書院より『建築見積便覧』を著している。
- 23) 『日本建築士』第22巻4号（昭和13年4月）掲載の「長野宇平治君追悼の座談会（於長野邸）」の記述による（駒木定正博士の御教示による）。
- 24) 当時の関西商工学校建築学科教務主理は河合浩蔵であった。この河合建築事務所は、大阪の河合浩蔵の建築事務所と考えられる。
- 25) 『建築雑誌』（大正9年8月）の巻末に大阪税関庁舎が紹介されており「設計監督 大蔵省、担当技術者 萩原博正」とある。
- 26) 途中の職歴不明。『履歴簿』に記載がない。
- 27) 1857-1922。明治15年工部大学校造家学科卒業。工部省技手。
- 28) 佐立忠雄の甥・佐立一郎氏（栃木県小山市在住）によると「北海道帝大勤務時代には寮かなにかの設計をしたらしい」と伝わっている。
- 29) 父は北海道庁旧庁舎の設計および監督に従事した北海道庁技術官・酒井啓次郎（桂次郎）である。菊次郎も喜一郎の別名を持つ。
- 30) 『北大百年史 通史』p.993
- 31) 宮本雅明『日本の大学キャンパス成立史』（九州大学出版会、1989年）参照。
- 32) 北海道大学施設部企画課所蔵。

(2000年5月10日原稿受理、2000年11月9日採用決定)